

平成30年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属池田中学校

1 附属池田中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属池田中学校

(2) 所在地

大阪府池田市緑丘1-5-1

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員464人(1年:1学級36人 23年:1学級40人)

(4) 幼児・児童・生徒数

465人(男子232人・女子233人)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 20人(うち, 臨時的雇用3人), 非常勤講師 7人
事務職員 6人(専任2人, 事務補佐員1人, 臨時的事務員3人), 臨時的用務員2人

2 附属池田中学校の特徴

安全教育に取り組み, セーフティプロモーションスクール(SPS)の認証を受けている。

グローバル化した社会で活躍できる人材を育てるため, 豊かなコミュニケーション能力と異文化への理解, 自ら課題を発見し, 解決する能力の育成に取り組んできた。現在は本校の教育理念に通ずるところの多い国際バカロレア教育のプログラムを研究し, その成果を教育委員会や公立諸学校等に還元, 普及することを目指している。

3 附属池田中学校の役割

(1) 教員養成大学である大阪教育大学の研究校である。

(2) 大阪教育大学の学生の教育実習校である。

(3) 現職教育への奉仕をする学校である。

(4) 常に新しい教育理念と中正な教育的信念をもち, 望ましい環境の内に個性を生かしながら, 真の中等普通教育を実施することを目指している。

(5) 一般生徒, 国際枠生徒(帰国生徒, 在日学国籍生徒), 学校災害特別研究生徒からなる混合学級で授業を行い, 新しい教育の開発を目指している。

4 附属池田学校の学校教育目標

人権尊重の精神を基に, 自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い, 激しく変化する社会に主体的に対応し, 国際社会に貢献できる, 生きる力に満ちた生徒の育成

5 附属池田中学校の学校教育計画

(1)共同研究「つなぐ力を持った子どもの育成」(仮)の推進および各自の研究力の向上

- ◎学習指導要領改訂を踏まえた共同研究の推進 ◎各教科・領域における評価(評価基準・評価規準)研究

(2)授業力の向上

- ◎国際バカロレア(IB)教育の推進及び研究 ◎言語活動の充実, 学校図書館・ICT の活用

(3)安全・安心な学校づくり

- ◎安全教育カリキュラムの確立 ◎SPS 校としての取組の充実と国内外への発信
- ◎安全管理の見直し・充実

(4)適切な組織運営, 開かれた学校づくり, 保護者・地域との連携

- ◎保護者・地域との連携 ◎責任ある校務分掌の遂行 ◎開かれた学校づくりの推進
- ◎学校評価の充実

(5) 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進

(6) 生徒との信頼関係を基にした生徒指導, 規範意識の向上と生活規律, 学習規律の徹底, いじめや不登校への対応

(7) 教育実習の充実

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に富んだ生徒の育成						
学校教育計画 1. 共同研究「つなぐ力を持った子どもの育成」の推進および各自の研究力の向上						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(1)学習指導要領改訂を踏まえた共同研究の推進	・中学校テーマ「探究・協働」ふりかえりの学習を通して、テーマに基づく各教科の授業づくり・評価研究を実施する。	共同研究会の持ち方を大きく変更したため、テーマ決定などの初動が遅れた。その影響もあり、テーマに基づく研究内容の追求は不十分であった。	小中高の共同研究の体制をさらに整え、全教科の教科領域部会を定期的で開催する。また、IBとの関連も強調し、教員にとって進めやすい研究テーマを設定したい。	C	昨年度の総括を踏まえ、今年度共同研究の持ち方を変更した点は評価できる。次年度に期待する。	B 小中高の共同研究の持ち方は継続しつつ、さらに「探究」を追求した研究テーマのもと、研究を深める。
(2)各教科・領域における評価(評価規準・評価基準)研究	・教科におけるIB評価材料(抜粋)の交流を行う。	日程の調整が困難であったが、講師の先生を招いて開催することができた。他教科の実践を聞くことで、アイデアやヒントを得たり、有意義なものになった。	充分な研修のための時間をもっと確保できるように、年間行事予定の中でも重要事項として位置づける。	B	限られた時間の中、研修を実施している。全職員が積極的に準備を重ねていることが実感できる。	B 今年度の研修内容を、新年度新たに加わる教員とも共有し、評価方法の確立のために定期的に教科会を開催する。

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に富んだ生徒の育成						
学校教育計画 2. 授業力の向上						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(1)国際バカロレア教育の推進及び研究	IB教育について、全教員が共通認識をもち、研修の機会を通してより理解を深める。	コーディネーターの尽力もあり、全教員が共通認識を持つことができた。ただし、理解度についてはまだ個人差が大きい。	研修の時間を確保する。放課後あるいは長期休暇中に研修の時間を確保できるように、行事等を精選する。	B	IB教育において、全教職員が共通認識を持って取り組んでいることは大変評価できる。	A 本校の最重要課題として位置づけ、研修の機会を確保する。外部の研修にも積極的に参加する。
(2)言語活動の充実、学校図書館・ICTの活用	ICTを活用した工夫ある授業を展開し、生徒の学校評価アンケートから、90%以上の生徒に授業に関して満足感をもち、またGoogleが提供するスクールクラウドおよびe-ポートフォリオを導入し、ICTの活用環境の向上を目指す。	アンケートでは電子黒板やコンピュータを利用した授業について肯定的な意見が90%を超えており、達成することが出来た。また、スクールクラウドやe-ポートフォリオの使用ができる環境の構築を行うことが出来た。しかし、生徒が活用できているのは2年生のみにとどまる。	新年度の早い時期に、外部の講師を活用して、教員がICTのツールを使いこなせるようにする。特に1年生には全員にタブレットを購入させるため、2学期には複数の教科が授業で活用することをめざす。	B	スクールクラウドやe-ポートフォリオなど、先駆的な取り組みをしている。生徒のアンケート結果でも高評価であることから、今後さらなる活用の促進を期待する。	B 4月の早い時期に教員研修を行う。生徒に対しても、基礎技能講座において、実践的な指導を行う。

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に富んだ生徒の育成						
学校教育計画 3. 安全・安心な学校づくり						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(1)安全教育カリキュラムの確立	各教科や総合の時間で行われている安全教育の授業を整理し、3年間を見通して体系化する。	本年度は、一年生を中心に防災の授業を3時間行い、カリキュラム化に向けて整理をすることができた。このままのペースで進めることが出来れば、3年間で、一通りの形が出来上がると考えられる。	カリキュラムが出来ても、実行する体制がない。3年間を通して実施できるように学校の体制として教育課程の中に位置づける。	A	安全教育カリキュラムについて、これまでの取り組みがしっかりと反映された。高水準のものが作成されているものと評価できる。	A 総合的な学習の時間の持ち方を検討する中で、すべての学年において安全教育をしっかりと位置づける。
(2)SPS校としての取組の充実と国内外への発信	生徒会・保護者等と連携した組織的な学校安全の取組をさらに推進するとともに、国内外にその取組を発信する。	安全委員は通学路の安全啓発ビデオ製作、保護者には救命救急講習、生徒会と部活動には救命講習と訓練などを行い、安全コーディネーター養成研修でも実践発表を行うことができた。	SPSについての職員理解がほとんどない。本校がいくつもの取り組みをする中で、安全に力を入れるならば、来年度は、職員理解が必要と考える。	A	今後もSPS認定校として、職員の理解を深めつつ、国内外に取り組みを発信してもらいたい。	A 生徒会の主催であっても、学校行事の中に位置づけて、全教職員の支援体制を組む。他校にも取り組みの成果を発信する機会を得る。
(3)安全管理の見直し・充実	学校安全マニュアルを改訂し、実際に即した年2回以上の防犯訓練、防災訓練の実施と評価の充実を図る。	予定通り、訓練を行うことができた。また、安全点検も2学期末現在、100%行うことができ、かなりの数の修繕などを行うことができた。	例年改訂されているマニュアルは複雑でわかりにくいという声があるので、しっかりと整理する必要がある。また、訓練の時期も効果的でない時期に行われていたため、次年度は時期の見直しを図りたい。	A	諸訓練・安全点検ともに計画通り実施されており、生徒・教職員ともに学校安全に対する意識は非常に高いものと評価できる。	A 改定された学校安全マニュアルを、年度初めにもちいて研修を行い、実践で確実に実施できる体制を整える。

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に富んだ生徒の育成						
学校教育計画 4. 適切な組織運営、開かれた学校づくり、保護者・地域との連携						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(1)保護者・地域との連携	保護者の学校評価アンケートにおいて、授業参観や学校行事、PTA活動に参加しやすいと感じる学校運営を行う。(保護者・PTA活動への参加に関する項目において90%以上の値で達成できるようにする。)	学校の諸活動に参加しやすいか、参観等学校行事や授業に参加しやすいという項目についてと、88%程度であった。概ね達成されたこととみられる。概ね達成されたこととみられる。概ね達成されたこととみられる。概ね達成されたこととみられる。	日程や、活動内容について保護者の意見を取り入れ見直しを図り、より活動しやすい方向に検討を行う。	B	アンケートの結果からも学校と保護者の関係が良好で、連携ができていことがうかがえる。従来より保護者との連携に心を砕いてきたことが成果となって現れている。	A 日程については次年度も大きく変更する予定はないが、書面やHP、ミマモルメなどを活用して、保護者の参加をいっそう促す。
(2)責任ある校務分掌の遂行	運営委員会を中心として、各分掌の長が十分に意見を出し合い、意思疎通ができるような学校運営を行うとともに、IBの校務分掌と従来の校務分掌の整合性について検証・検討を行う。	運営委員会において活発な意見交換を行うことが出来た。校務分掌についてはより良い方向に変化する試金石となる一年であり、過不足について十分検討を行うことが出来た。	議論が長時間に及ぶことがあった。設定時間や回数について検討を行う必要がある。	A	運営委員会が中心となって、活発な意見交換が行えたことは、今後の学校運営にとって効果的である。	A 運営委員会と職員会議が有機的に連携するよう、1年を通して計画的に実施する。
(3)開かれた学校づくりの推進	学習評価等の基準や進路情報、公文書等を適切に発信する。PTA総会で説明を行ったり発信に合わせた進路指導を、家庭と連携しながら進めていく。PTA総会や、HP、ミマモルメ、学校説明会を通して、学校における取り組みの発信を積極的に行うとともに、	HPやミマモルメについては有効に活用を行うことが出来た。学習評価規程については、PTA総会で説明を行ったり発信をすることが出来た。進路情報について、例年通り文章で発信することができた。担任・進路担当・管理職が連携しながら、個に応じた指導を進めることができた。	スライドの内容や資料についてIBとの整合性をより精査して新しい形で提案していく必要がある。多様な進路指導を教員集団がしっかりと理解できるように工夫が必要である。公立高校に向けた指導について学校の考えをしっかりと示せるように、資料などを見直す必要がある。	A	学校HPでは、学校の取り組みがわかりやすく掲載されている。学校運営に大きな関心を持っている。本校の保護者にとって、その関心に答える情報の発信がなされている。	A 次年度はIBの基準による学習評価を本格的に実施する。生徒・保護者にとって、複雑に感じられると思われるので、PTA総会のみならず活用して、より丁寧な情報発信が必要とされる。
(4)学校評価の充実	昨年度の学校評価の結果を念頭に置きながら、会議等で提案や検討を行い、評価項目の検討を行う。	学校評価アンケートについて、運営委員会と過年度のデータとの連続性も踏まえながら、しっかりと検討を行うことが出来た。	IBについては、発信が不足しており、アンケート等を通して不十分な状況であったとされており、IBも含めて学校のあり方を包括的に示していく必要がある。	B	学校評価アンケートのフィードバックを行っている姿勢を評価する。今後も継続してほしい。	A 学校評価アンケートをよりいっそう効果的なものとなるよう、アンケート項目の検討を行う。

自己評価		学校関係者評価		
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である	
B	達成できた	B	おおむね適切である	
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない	
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない	
		E	判定できない	

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成							
学校教育計画 5. 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進							
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進	真の自主・自律の確立。他者理解を深め、人としての誇りがもてる道徳教育を計画的・組織的に推進する。学級においては、班単位の活動を活発にし、あらゆる教育活動の中で互いの違いを認め合うことを意識した話し合いの活動を多く取り入れる。また、コミュニティープロジェクトでは社会の中の自分を意識して取り組ませる。	「道徳の時間」には読み物だけでなく、様々な分野から題材を得、工夫を凝らした授業を行った。約83%の生徒が「道徳の時間」は人としての生き方を考える上で有効な時間になっていると回答している。学級では、総合的な学習や行事などを経て、個人と集団の関係を意識させ、コミュニケーションの向上を図った。1年を経過して人間関係が深まり、満足して学校生活を送っている約94%の生徒が回答している。コミュニティープロジェクトでは、キャリア教育との関連性も視野に入れ、継続的に役立つ力が身につくように計画的に実施した。	「道徳の時間」では現在用いているワークシートに加え、道徳ノートを活用し、適切に評価を行う。学年毎にめざすべき生徒像をゴールとして教員間で共有する。総合的な学習や学活などを通して、「対話」「振り返り」を可能にするプログラムに取り組む。グループワークなどで集団を育てつつ、一人一人の自己肯定感を形成する。生徒会や専門委員会からの呼びかけを行い、規範意識の低い生徒に、正しい考え方を伝えていく活動を行う。国際校生徒の良さを生かした活躍の機会を多くし、異文化理解を進める。	A	「道徳の時間」での題材の工夫や道徳ノートの活用、学級集団作りの取り組みを通して、生徒の人間関係作りが良好であると感じられる。	A	「道徳の時間」の研究を活性化し、全教職員で研修できる機会を持つ。また、3年で実施するコミュニティープロジェクトに向けて12年生の学習が積み重ねられるよう、総合的な学習の時間の内容を精選する。学級を核とした集団作りには、学年ごとに目指すべき生徒像を明確に持ち、取り組む。

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成							
学校教育計画 6. 生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応							
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応	日々の指導に加えQUテストを用いて集団・個人の状況を理解し、指導に当たる。また、いじめアンケートを用いて、いじめ予防・早期発見に努める。また、不登校生徒に対してアセスメントを行い、個に応じた指導に努める。	今年度は、計画的に適切な時期を選び、QUテスト、いじめアンケートを行うことができ、効果的な指導が行えた。	様々な生徒指導が起こったが、厳しくも生徒に寄り添った指導を行った場合は、上手く指導ができていたが、そうでない場合は大きな問題となっている。次年度は生徒指導の考え方から共通理解を図りたい。また、前年度までいじめアンケートをしていなかったことは大きな問題であり、この危機感のなさを改善するために、うやむやにせず追及していきたい。	A	QUテストに加え、今年度いじめアンケートを行ったことは、いじめに対する意識が高まったことと評価できる。今後の取り組みに期待する。	A	次年度もQUテスト・いじめアンケートともに回収した日のうちに担任が把握することに加え、学年集団においても同じ情報を周知することを徹底し、生徒に対してチームで対応する。

学校教育目標 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成							
学校教育計画 7. 教育実習の充実							
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
教育実習の充実	教科指導や学級指導において、指導教員を中心に個々の教育実習生の課題を把握し、各教科・実習部・管理職・大学と協力体制をとる。	担当者自身、大学との連携など分からないことが多い中、各教科の教員を中心に協力して実習を進めた。また、各教科それぞれに方針を持って丁寧な指導をした。実習生の数は多いが、各教科から実習生の課題等連絡があったため、実習担当者も把握することができた。今後もこの体制を続けていきたい。	教科によって指導に差があることや、実習生の能力の差、授業時数の差などの課題がある。来年度から実習に要する日数が変わることや、旧校定校になることも踏まえ、教育実習を充実させるためにも業務の精査は必要だと感じる。しかしながら附属中学校として、学生にとってよりよい実習になるよう努める義務を忘れてはならない。	B	今後も教員の育成について尽力を願いたい。	A	各教科で実習生に与える課題を精選し、適正な時間数の中で、実践力が身につく、即戦力となる学生を育成する。